

Münchner
Philharmoniker

A decorative horizontal flourish consisting of a central diamond-shaped motif with symmetrical, curved lines extending outwards to the left and right.

公演日程

昭和47年

2 月

2 日 北海道厚生年金会館 〈午後 6 時 30 分開演〉

主催＝札幌オリンピック冬季大会組織委員会・日本放送協会・北海道・札幌市
後援＝外務省・ドイツ大使館

4 日 宮城県民会館 〈午後 6 時 30 分開演〉

5 日 東京文化会館 〈午後 6 時 30 分開演〉

6 日 東京文化会館 〈午後 6 時 30 分開演〉

7 日 愛知県勤労会館 〈午後 6 時 30 分開演〉

8 日 岡山市民会館 〈午後 6 時 30 分開演〉

9 日 高松市民会館 〈午後 6 時 30 分開演〉

11 日 松山市民会館 〈午後 7 時開演〉

13 日 福岡市民会館 〈午後 6 時 30 分開演〉

14 日 小倉市民会館 〈午後 6 時 30 分開演〉

15 日 広島市公会堂 〈午後 6 時 30 分開演〉

16 日 大阪フェスティバルホール 〈午後 7 時開演〉

主催＝日本放送協会・NHK サービスセンター 後援＝外務省・ドイツ大使館

Münchner Philharmoniker

ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団



1972

R. Kys

NHK



日本放送協会
会長
前田 義徳

前田義徳

NHKでは、海外からすぐれた芸術家やオーケストラを招き、そのすばらしい演奏を紹介し、わが国の音楽文化の向上と国際親善に努めてまいりました。

このたびは、1972年のオリンピックの開催地、音楽都市ミュンヘンから、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団を招へいし、札幌オリンピック冬季大会の芸術行事参加をはじめとして、全国11都市で12回の公演を行なうとともに放送を通じて全国に紹介することになりました。

ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の日本公演はこれが最初であります、歴史と伝統に輝くこのオーケストラの正統的で格調高い堂々たる演奏は音楽ファンの期待にこたえるものと確信いたします。

この公演の実現にご尽力いただいた関係各位に深く感謝します。



札幌オリンピック冬季大会組織委員会

会長

植村 甲午郎

植村甲午郎

オリンピック大会時、競技と並んで行なわれる最高水準の芸術行事として、ミュンヘンオリンピック組織委員会は、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団とNHK交響楽団の交歓演奏会を、大会期間中に日独両国で開催することを企画提案され、札幌オリンピック冬季大会組織委員会も賛意を表し、このオーケストラの間にその具体化が進められここに実現をみるに至りましたことは誠に同慶にたえません。

わが国においては、札幌をはじめ各地でミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の至芸が披露され、両国民の友情を高めるであろうことは疑いをいれません。

NHKをはじめ関係各位のご尽力に深く敬意を表するものであります。



ミュンヘンオリンピック競技大会組織委員会

会長

ウィリー・ダウメ

Willy Däumle

札幌とミュンヘンは長年にわたって姉妹都市であります。オリンピックが開催される今年は、ふたご都市になります。特に、本年は日独間の伝統ある文化交流の歴史にさらに輝かしい一頁をくわえることになります。それは日独両国の世界的に有名な二つのオーケストラの交歓演奏であります。

札幌オリンピック冬季大会組織委員会とNHKがミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団を招待して下さったことに感謝の意を表します。ドイツの最もすぐれたオーケストラのひとつであるこの楽団が、指揮者、独奏者をともなって日本各地で演奏し、日本の皆さまにおめにかかることを誇りに思います。数々のコンサートがそれぞれ日独両国民の友好を深め、さらに精神的に結びつける音楽という絆をひきしめてくれることを希望します。

ここに、1972年の第20回オリンピック競技大会組織委員会を代表して、日本の皆さまにごあいさつを申し上げます。そして、今年の8月から9月にかけて、ミュンヘンでのオリンピックにNHK交響楽団が訪れることを心から待ちのぞいております。





ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団について

ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団は、西ドイツ・バイエルン州の首都であり、ヨーロッパ音楽文化の中心地の一つであるミュンヘンの市立管弦楽団として活躍を続けているヨーロッパ第一級のオーケストラで、その歴史は古く1893年にミュンヘンの音楽愛好家フランツ・カウムによって創立されました。ミュンヘン・フィルハーモニーという名称は、ちょうど、ほぼ10年前に結成されたベルリン・フィルハーモニーが、当時ハンス・フォン・ビューローの下で、着々とその名声を高めていたのに対抗しようという意図も、持っていたようです。しかし、創立当初から、このオーケストラは創立者の名に因んで、専らカウム・オーケストラと呼ばれて人々に親しまれ、とりわけ最初のシーズンからポピュラー・コンサートを積極的に行なって人々の人気を集めました。ともかく、この時以来、ミュンヘンでは、すでに19世紀の始めから公開演奏会を開いていたミュンヘン宮廷楽団とこのカウム・オーケストラとが華々しい競演をくりひろげることとなるのです。

歴代の常任指揮者のうちで、このオーケストラの創成期に大きな役割りを果たした人としては、まず1897年からその地位についたフェルディナント・レーヴェをあげなくてはならないでしょう。レーヴェはブルックナーの弟子であり、今日ではブルックナーの交響曲の校訂者としてよく知られていますが、彼は、ブルックナー

の作品をしばしばとりあげて、このオーケストラが後に「ブルックナー・オーケストラ」として名声を高める最初の発端を作り、その秀れた演奏を広く認められるようになりました。次いで1898年から1905年までは、当時、少壮気鋭の指揮者であった若きフェリックス・ワインガルトナーが常任指揮者に迎えられ、このオーケストラの実力を飛躍的に向上させました。

創立以来、フランツ・カウムの献身的な努力にも拘らず、しばしば財政的な危機にみまわれたこのオーケストラは、1908年に創立者の手をはなれ、コンツェルト・フェルアイン・オーケストラと呼ばれるようになりました。そして、このころから第1次世界大戦までの時期に、このオーケストラは最初の黄金時代を迎えることとなるのです。グスタフ・マーラー、リヒャルト・シュトラウスなどの作曲家が、たびたび自分の作品を指揮したほか、客演指揮者としては、ブルーノ・ワルター、ウィルヘルム・フルトヴェングラーなどが、しばしばその指揮台にのぼって、すばらしい成功を収めました。とりわけ注目すべきこととしては、1910年にマーラーが「千人の交響曲」と呼ばれる彼の大作、第8交響曲を自ら指揮して、このオーケストラで初演したことや、ブルーノ・ワルターが、マーラーの死の直後1911年に、彼に託された交響曲「大地の歌」を、やはりこのオーケストラで初演していることなど

KONZERT-BUREAU EMIL GUTMANN

TONHALLE

Montag, den 20. November, abends 8 Uhr
(Öffentliche Hauptprobe: Sonntag, den 19. November, vormittags 11 Uhr)

ORCHESTER-KONZERT

Ausführender:
Hauptkapellmeister **BRUNO WALTER**

Solo: **MM. CHARLES CAHIER (Alt)**
MARIE MÖHL-KNAB (Sopran)
WILLIAM MILLER u. k. Hofopernsänger (Tenor)

Chor: **ORATORIEN-VEREIN AUGSBURG**
unter dem hohen Patronat
S. K. Hohen des Prinzen Ludwig, Erbprinz von Bayern

Orchester: **KONZERTVEREINS-ORCHESTER**
auf 100 Klaviere vergrößert

(Orgel: Hoforganist Prof. **LUDWIG MAIER**)

I. AUFFÜHRUNG:
URAUFFÜHRUNG
„DAS LIED VON DER ERDE“
Eine Symphonie für eine Tenor- und eine Altstimme und großes Orchester
(Entwurf von Hans Pöhlner, „Charmante Fäule“)

1. Das Trübsal- und Jammer der Erde
2. Der Einsame im Herbst
3. Von der Jugend
4. Von der Schönheit
5. Der Trunkene im Frühling
6. Der Abschied

II. AUFFÜHRUNG:
ZWEITE SYMPHONIE C-moll
für großes Orchester, Solo, Chor und Orgel

1. Allegro moderato
2. Andante moderato
3. In sehr ruhiger flüchtiger Bewegung
4. „Ullrich“ (Sehr feierlich und schlicht)
5. Im Tempo des Scherzos (Sehr zurückhaltend — „Der Ruler in der Wüste“ — „Der große Appetit“)

1911年、交響曲「大地の歌」初演の時のポスター



フェルディナント・レーヴェ
Ferdinand Löwe (1865~1925)



フェリックス・ワインガルトナー
Felix Weingartner (1863~1942)

を、あげることができるでしょう。

第1次世界大戦が終ると、作曲家として名高いハンス・プフィッツナーを常任指揮者に迎えて、ふたたび活動をはじめ、その後1920年からはジークムント・ハウゼッガー、1938年からはオスワルト・カバスタが常任指揮者となりました。両大戦間の時代に、ブルックナーの交響曲の紹介に情熱をもやした、この二人の指揮者の功績は誠に大きく、1928年以後、ふたたび創立当初の正式名称であるミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の名称で呼ばれるようになったこのオーケストラは、「ブルックナー・オーケストラ」としての名声を全ヨーロッパに広め、第2の黄金時代を迎えたのです。

第2次世界大戦の惨禍はこのオーケストラにもおよび、決定的な打撃を受けたにも拘らず、早くも1945年には、現代音楽の紹介者として名高いハンス・ロスバウトを常任指揮者に迎えて、戦後の再建にのり出しました。また、この時以来、ミュンヘン市がこのオーケストラの全責任を負うことになり、名実ともにミュンヘン市立の管弦楽団として、新たな第一歩をふみ出したのです。その後、1949年から1966年までは、フリッツ・リーガーの下に、地味ながらも着実な歩みを続け、1967年以後は堅実な演奏を誇る名指揮者ルドルフ・ケンペが常任指揮者となり、ここに、このオ

ーケストラは第3の黄金時代を迎えました。また第2次世界大戦後の客演指揮者としては、当然のことながら、ミュンヘンにゆかりの深い名指揮者たち——ハンス・クナッパーツブッシュ、ヨゼフ・カイルベルト、オイゲン・ヨッフム、カール・リヒター、ウオルフガング・サヴァリッシュなどがたびたび指揮台に立ち、秀れた演奏をきかせています。

現在、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団は、王宮内にあるヘラクレス・ザールを本拠として演奏活動を行なうほか、毎年夏に開かれるミュンヘン・オペラ祭では、バイエルン国立歌劇場のオーケストラとともに、いくつかのだしものを受けもつなど、ミュンヘンの音楽文化の重要な手の一つとして活躍を続けています。

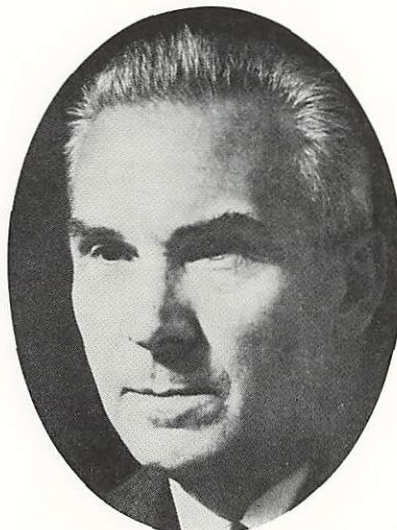
なお、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団は創立当初から、たびたび国外への演奏旅行を行なっており、戦後ではフリッツ・リーガーの時代に、殆んどヨーロッパ全域にわたる演奏旅行を行なっており、ドイツの第一級のオーケストラとしての実力を各地で高く評価されています。ヨーロッパ以外への演奏旅行は、このたびの日本公演がはじめてですが、ドイツ音楽を得意とする名指揮者ヴァーツラフ・ノイマンのもと、輝かしい歴史と伝統につちかわれた名演奏をきかせてくれるものと思われます。



ハンス・プフィッツナー
Hans Pfitzner (1869~1949)



ハンス・ロスバウト
Hans Rosbaud (1895~1962)



ルドルフ・ケンペ
Rudolf Kempe (1910~)





指揮
ヴァーツラフ・ノイマン

VÁCLAV NEUMANN

Conductor

ヴァーツラフ・ノイマンは現代ヨーロッパの最も秀れた指揮者の1人であり、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、ライプチヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団など、ヨーロッパ第一級のオーケストラの常任指揮者を歴任し、すでにその名声は不動のものとなっています。

ノイマンは、1920年ブラハで生まれ、ブラハ音楽院で学んだ後、スメタナ弦楽四重奏団の創設に参加し、そのビオラ奏者として音楽生活のスタートを切りました。チェコの名指揮者ヴァーツラフ・ターリヒについて指揮も学んでいたノイマンは、その後、専ら指揮活動に専念するようになり、まずブラハ交響楽団の首席指揮者として活躍するようになりました。さらに、1956年からは、フェルゼンシュタインの演出で名高い東ベルリンの歌劇場「コーミッシェ・オペー」に招かれて、ヤナーチェクのオペラを始めとする多くの新演出の上演を手がけ、大成功を収めました。

以来、ドレスデン、ライプチヒなどの東ドイツの都市をはじめ、ヨーロッパ各地を客演して、次第にその指揮者としての秀れた才能を認められるようになりました。

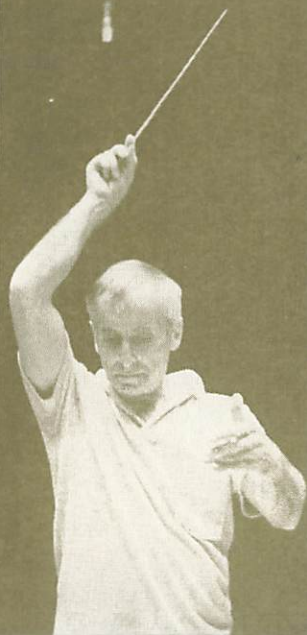
1964年からは、カレル・アンチェルとともにチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者となり、さらに1965年からは、フランツ・コンヴィチュニーの後任として、ヨーロッパで最も古い伝統を誇るライプチヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の常任指揮者およびラ

イプチヒ歌劇場の音楽総監督をも兼ねることとなりました。かつて、ニキッシュ、フルトウェングラー、ワルターなどの大指揮者にひきいられ、ドイツ音楽の最も正統的な伝統をひきついでいるとみなされているこのオーケストラに、ノイマンが招かれたということは、彼の音楽が、いかに正統的で純粋であるかを示すものといえましょう。

その後、1968年のチェコ動乱に際して、カレル・アンチェルがカナダのトロント交響楽団へ移ると、ノイマンはライプチヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の首席指揮者の地位を辞して、専ら、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者の重責を、その一身に引き受けることとなりました。

なお、翌1969年には、ノイマンはチェコ・フィルハーモニー管弦楽団をひきいて、初めて日本を訪れ、全国各地で、チェコの作曲家の作品やドイツ音楽の正統的な作品で、すばらしい名演奏をきかせ、わが国の聴衆に深い感銘を与えたことは、今日なお、私たちの記憶に新らたなところです。

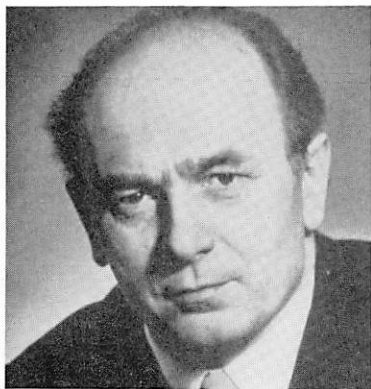
こうした経歴からもうかがわれるように、ノイマンはチェコスロバキアの音楽家ではありますが、チェコのローカル色の強い人ではなく、その音楽は、あくまで正統的で普遍的であるという強みをもっています。ノイマンの指揮の特色は、まず第一に、すべての音が深く内面的な感動と結びついていること、第二に、外面的な効果や、末端の表現にとらわれず、作品のあるがままの姿を正しく伝えようとしていることなどで、こういった彼の秀れた資質が、かつてライプチヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団を指揮しても、その伝統の重みを正しく受けとめた名演奏をきかせたものと思われまます。すでに、たびたび協演して成果をあげているミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団をひきいての今回の日本公演も、この古い歴史を誇るオーケストラの実力を十分に発揮させて、名演奏をくりひろげるものと期待されています。



ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団とともに出演する予定で
ありました指揮者のヴァーツラフ・ノイマン氏は、チェコスロバキ
ア政府が出国を許可しなかったために来日が不可能となりました。

このため、フリッツ・リーガー氏が急ぎょ来日し指揮をとること
になりました。同氏は、かつて18年にわたってミュンヘン・フィル
ハーモニー管弦楽団の常任指揮者をつとめたドイツの指揮者です。

悪しからず、ご了承下さいますようお願い申し上げます。



指揮＝フリッツ・リーガー (Fritz Rieger)

1910年にチェコスロバキアのトラウテナ
ウで生れたドイツの指揮者。

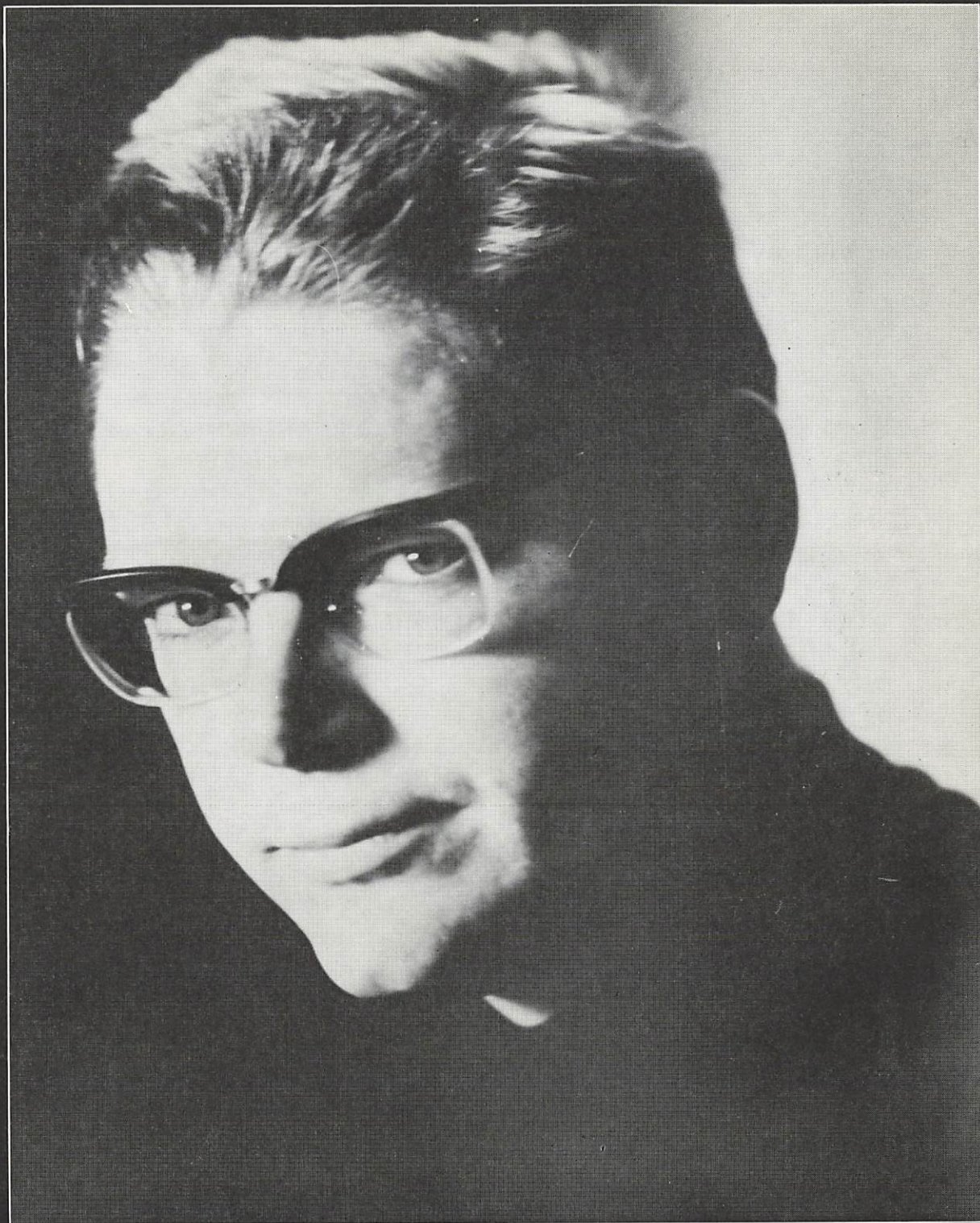
プラハ音楽院で、故ジョージ・セルに指
揮法を学び、1931年、21才の若さで、プラ
ハのドイツ歌劇場の指揮者となった。

その後、チェコスロバキアのアウシヒ、
ドイツのブレーメン、マンハイムなどでオ
ペラ指揮者をつとめた。

1949年から1966年まで、ミュンヘン・フ

ィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者をつ
とめると共に、バイエルン国立歌劇場で
は、リヒャルト・シュトラウスのオペラを
たびたび指揮して好評を博した。

18年のながきにわたって、ミュンヘン・
フィルハーモニー管弦楽団を、ドイツの代
表的なオーケストラに育てあげた功績は大
きく、ドイツ音楽の伝統にのっとった堅実
な指揮ぶりは高く評価されている。



指揮
ハンス・ツェンダー

HANS ZENDER

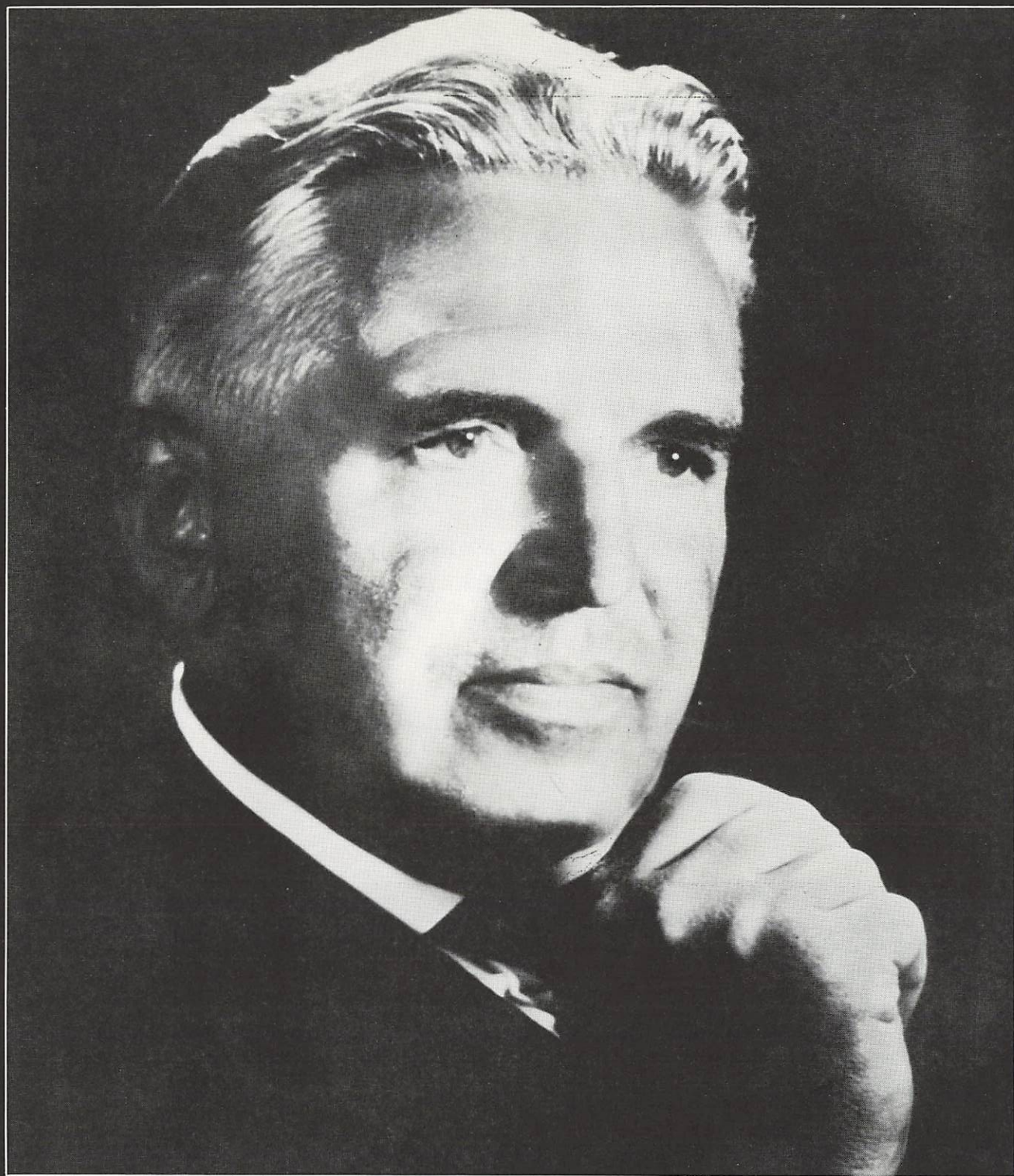
Conductor

ハンス・ツェンダーは、現代の西ドイツの若い世代を代表する指揮者の1人です。

1936年、ヴィースバーデンで生まれ、フランクフルトとフライブルクで作曲、ピアノ、指揮を学びました。フライブルクの歌劇場で副指揮者として活躍した後、31才の若さで、キール歌劇場の音楽総監督に就任し、当時西ドイツでは最年少の音楽総監督として注目されました。その後、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、スイス、チューリヒのトーン・ハレ管弦楽団などを客演して成功を収め、昨年9月からはザール放送交響楽団の首席指揮者もつとめています。

現代音楽にも深い関心を持ち、自ら作曲もするツェンダーは、西ドイツの若い世代の代表的な指揮者の1人として、その若さにあふれた、明快で、知性的な指揮ぶりは、内外に広く認められてきており、今後の活躍が多いに期待されています。





ピアノ
ハンス・リヒター・ハーザー

HANS RICHTER-HAASER

Piano



ハンス・リヒター・ハーザーは現代ドイツの最も活動的なピアニストの1人で、ベートーベンを得意とし、また作曲家、指揮者としても活躍した、きわめて経験豊かな音楽家です。

1912年ドレスデンで生まれ、ドレスデンの音楽学校で学んだ後、ピアニスト、指揮者、作曲家として幅広い活躍をはじめました。

第2次世界大戦に従軍したため、その間演奏活動を中止せざるを得ませんでした。戦後は、デトモルトで、まずオーケストラ指揮者として活動を始め、かたわら同地の音楽アカデミーでピアノの教授をつとめました。戦争による空白を克服しようとする超人的な努力の末、ピアニストとしての演奏活動も再び始められ、ヨーロッパ全土はもとより、アメリカ、アジア、南アフリカにまで演奏旅行を行なって、広く全世界の音楽ファンに、その折目正しい正統的なベートーベンやブラームスをきかせました。また、作曲家としても、オペラ、交響曲、協奏曲など数多くの作品を発表し、常に幅広い多面的な活動を続けてきました。

1963年には初めてわが国を訪れて、すばらしい演奏をきかせましたが、1969年にも再度来日し、このときもNHK交響楽団と協演して、ベートーベンのピアノ協奏曲「皇帝」の名演奏をきかせ、また、7日間にわたるベートーベンのピアノ・ソナタ全32曲の連続演奏会を開いて、日本の音楽ファンに深い感銘を与えました。

一昨年1970年は、ベートーベンの生誕200年にあたり、リヒター・ハーザーはベートーベンの世界的な権威として、ドイツ国内はもとより、イギリス、アメリカなど各地の記念行事に招かれて、その正統的な解釈を改めて人々に認識させることとなりました。

リヒター・ハーザーは、その豊かな経験と幅広い活動からもうかがえるように、総合的な音楽家であり、彼のピアノも常に作品の全体的な把握を心がけたもので、内面的にきわめて充実した演奏をきかせることを特色としています。

そういった意味で、今回のミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団との協演は、モーツァルト、ベートーベンのピアノ協奏曲の真髄にふれる非常に充実した演奏になるものと期待されています。



バイオリン
エディット・パイネマン

EDITH PEINEMANN

Violin



エディット・パイネマンは、現在めざましい活躍を続けている西ドイツの女流バイオリニストです。

1937年、西ドイツのマインツに生まれ、最初バイオリニストであった父親から手ほどきを受け、その後、ハインツ・シュタンスケ、マックス・ロスタルなどに学びました。

1956年、19才のとき、ミュンヘン国際音楽コンクールで第1位に入賞し、独奏者としての活躍をはじめました。

ヨーロッパの各地で演奏して好評を博した後、1964年のアメリカ旅行では、カーネギー・ホールでの演奏会で大成功を収め、その才能を広く認められるようになりました。

パイネマンは、すでにこれまでに、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団、ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団、クリーヴランド管弦楽団、ボストン交響楽団などの世界各国の一流オーケストラと協演して好評を博しており、そのレパートリーも、バッハからバルトークに及ぶ幅広いものです。

彼女の演奏の魅力は、既成の大家にない、はつらつとした若さをもっていることで、どのような大曲に対しても、常にのびのびと自己を主張して音楽を作っていくという、すがすがしさを見せています。久々にドイツが生んだ女流バイオリニストとして、そのめざましい活躍ぶりが、大変注目されています。



チェロ
アンゲリカ・マイ

ANGELICA MAY
Violoncello

アンゲリカ・マイは、国際的にも高い評価を受けている西ドイツの女流チェロ奏者です。

シュツットガルトの音楽家の家庭に生まれ、幼いときから、ピアノとバイオリンを学びました。その後、シュツットガルト音楽院で、チェロの勉強を始め、ルートウィヒ・ヘルシャーについて本格的にチェロを学びました。

1954年からは巨匠パブロ・カザルスの教えを受け、1957年には、パリで開かれたパブロ・カザルス国際コンクールでグラン・プリを受賞して、一躍その名声を高めました。

以来、独奏者として、ヨーロッパ各地で活躍するほか、ロルフ・ラインハルトのひきいる室内合奏団コレギウム・アウレウムメンバーとして、室内楽奏者としても幅広く活躍しています。

なお、1966年には、はじめてわが国を訪れて、東京都交響楽団と協演して好評を博しました。



ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団

● 第1バイオリン

クルト・グントナー
フリッツ・ゾンライトナー
ウェルナー・グローブホルツ
ロベルト・ベルガー
エドムント・ブスル
ハンス・ヘルヒェンハーン
ゲオルク・マイヤー
ルートウィヒ・バービンガー
トーマス・ミッテルベルガー
アドルフ・レーマン
パウル・リヒター
ヨゼフ・カールショイヤー
エーリッヒ・ビーダー
クラウス・ミュンター
ハンス・シュスター
ルドルフ・アイヒンガー
ギュンター・フェルト
マックス・フィッシャー
カルラ・モール

● 第2バイオリン

アルフレート・シュミット
フリートリヒ・アイスラー
ハンス・ヴィースベック
ノルベルト・ヴィックル
ルートウィヒ・リントナー
アルフレート・ブランドルファー
伊達 充子
カールハインツ・ウェッツェル
ヘロルト・フリントナー
ユルゲン・ゴットマン
フロリアン・ゾンライトナー
イローナ・ウェーニンガー
ベルトルト・ゲッセル
ディートマル・フォルスター
フリッツ・アイクホッフ

● ヴィオラ

ジークフリート・マイネッケ
アンネマリー・グンター
ダインハルト・ゴリツキー
ユルゲン・シュミット
フランツ・フィッシャー
ベーター・クリスティアン・シュタインクラウス
ジーン・リーバー
エドムント・ウムブライト
ハインツ・ブロープスト
ゲロ・ルンブ
ラファエル・ヴォイジック
ハンス・ディートリッヒ・ラーベ
ワルター・シュタングル

● チェロ

フリッツ・キスカルト
ハインリヒ・クルーク
フランツ・フィッシャー
エルンスト・フェーンドリヒ
ヘルマン・ディル
ウィリー・シュミット
アルトゥール・コンゼー
パウル・ホルツフルトナー
エーリッヒ・ブルックナー
イェルク・エッグブレヒト
ヨハネス・フィンク

● コントラバス

ヘルベルト・デュフト
エルウィン・ゲッツ
鈴木良範
アルベルト・シュタングル
ルドルフ・アーグルト
オットー・ベルンハルト
フランツ・ウルバス

フランク・イェルク・ジルヒ
ウォルフガング・ネッスル

● フルート

マックス・ヘッカー
コンラート・ハンベ
ハンス・ビリヒ
パウル・ゲスワイン
アルベルト・ミュラー

● オーボエ

ゲルノート・シュマルフス
ロベルト・エリスク
フリッツ・ストロウツキー
アンドレアス・シュヴィン
ゲルハルト・ヘルマン

● クラリネット

ウォルフガング・シュレーダー
カールハインツ・ハーン
ベーター・フレミヒ
アウグスト・ゾルトナー
ウィルヘルム・メールス

● ファゴット

リヒャルト・ボップ
ヨゼフ・ベーター
クルト・クラマー
ハンス・ロッチュ
ハインツ・ゼプト

● ホルン

ゴットフリート・ランゲンシュタイン
ミヒャエル・ヘルツェル
カール・ハンマー
ハインツ・ワーグナー

アルトゥール・アイトラ
パウル・フィヒトラ
ウィーラント・ワーグナー

● トランペット

ウェルナー・ビンダー
ゲルハルト・グライフ
パウル・ワイデマン
ヘルマン・ゲス

● トロンボーン

ロベルト・マイスナー
アルトゥール・ミドウルトーン
ルートウィヒ・ホップフナー
ハリー・キースリング

● テューバ

ホルスト・ゲルゲン

● 打楽器

マティアス・ホルム
マンフレート・トラウナー
ハンス・カッペル
カールハインツ・ベッカー

● ハープ

マリアンネ・フェルビンガー

● 事務局員

ハインツ・ワイラー
アダム・フェント
アンネリーゼ・リードル
ヨゼフ・フーバー
アドルフ・ラインドル
エゴン・クラマー

この演奏旅行のドイツ側におけるマネジメントは、

すべて西ベルリンおよびミュンヘンの

インターナショナル・アーチスト・プロダクションズのエヴァ・エフ・メーズによる。

Die Mitglieder der Münchner Philharmoniker

● 1. Violinen

Kurt Guntner
Fritz Sonnleitner
Werner Grobholz
Robert Berger
Edmund Pusl
Hans Herchenhan
Georg Meier
Ludwig Babinger
Thomas Mittelberger
Adolf Lehmann
Paul Richter
Josef Kahlscheuer
Erich Bieder
Klaus Mynter
Hans Schuster
Rudolf Eichinger
Günter Feldt
Max Fischer
Carla Moll

● 2. Violinen

Alfred Schmid
Friedrich Eisler
Hans Wiesbeck
Norbert Vichr
Ludwig Lindner
Alfred Brandhuber
Mitsuko Date
Karlheinz Wetzel
Herold Flintner
Jürgen Gottmann
Florian Sonnleitner
Ilona Weninger
Berthold Götschel
Dietmar Forster
Fritz Eickhoff

● Bratschen

Siegfried Meinecke
Annemarie Guntner
Deinhart Goritzki
Jürgen Schmidt
Franz Fischer
Peter Chr. Steinkrauß
Jean Rieber
Edmund Umbreit
Heinz Probst
Gero Rump
Rafael Wojsyk
Hans-Dietrich Rave
Walter Stangl

● Violoncelli

Fritz Kiskalt
Heinrich Klug
Franz Fischer
Ernst Faehndrich
Hermann Dirr
Willi Schmid
Arthur Consée
Paul Holzfurtner
Erich Bruckner
Jörg Eggebrecht
Johannes Fink

● Kontrabässe

Herbert Duft
Erwin Götz
Yoshinori Suzuki
Albert Stangl
Rudolf Agert
Otto Bernhard
Franz Urbas
Frank Jörg Sirch
Wolfgang Nestle

● Flöten

Max Hecker
Konrad Hampe
Hans Billig
Paul Gößwein
Albert Müller

● Oboen

Gernot Schmalfuß
Robert Eliscu
Fritz Strowitzki
Andreas Schwinn
Gerhard Hermann

● Klarinetten

Wolfgang Schröder
Karlheinz Hahn
Peter Flahmig
August Soldner
Wilhelm Mehls

● Fagotte

Richard Popp
Josef Peters
Kurt Krahmer
Hans Lotsch
Heinz Sept

● Hörner

Gottfried Langenstein
Michael Höltzel
Karl Hammer
Heinz Wagner
Arthur Eitler
Paul Fichtler
Wieland Wagner

● Trompeten

Werner Binder
Gerhard Greif
Paul Weidemann
Hermann Göß

● Posaunen

Robert Meißner
Arthur Middleton
Ludwig Hopfner
Harry Kießling

● Tuba

Horst Görgen

● Pauken und Schlagzeug

Mathias Holm
Manfred Trauner
Hans Kappel
Karlheinz Becker

● Harfe

Marianne Felbinger

● Direktion

Heinz Weileder
Adam Fendt
Anneliese Riedl

● Orchesterwarte

Josef Huber
Adolf Reindl
Egon Krammer

Exclusive Management and Tour Direction:
Eva F. Maze, International Artists Productions,
Berlin and Munich, West Germany

音楽の都ミュンヘン

中野博詞

西ドイツの芸術の都をたずねるならば、現代芸術に意欲をもやすベルリン、充実した芸術運動をいとなむハンブルク、これらとならんで伝統に生きる古都ミュンヘンを忘れることはできません。オーストリアと国境を接し、イタリアにも近く、アルプスの山なみと優美な湖にかこまれたバイエルン州の中心に、古代ギリシャ・ローマの世界をほうふつさせる古風な街並をきづいたミュンヘン。そこには、なまりの強いバイエルン方言で親しく語りかけてくる陽気な市民たちが、往時の伝統をしっかりと守り続けているのです。北ドイツからミュンヘンを訪れると、同じドイツとは思えない穏やかで優雅な情緒を肌感せずにはおれません。しかし、パリやウィーンにくらべれば、田舎臭さが前面におしだされています。ミュンヘンは、決して流行を追ひ求める現代的な都市ではなく、ドイツの粗野な風ぼうと南の抒情性が歴史のなかに美しくとけあって、ミュンヘン特有の雰囲気をかもし出しているのです。近代的なオペラ劇場が各地に建造された今日、バイエルン国立歌劇場（Bayerische Staatsoper）が、伝統的な劇場様式とけんらん豪華さを誇る往時の姿そのままに再建されたことにも、ミュンヘン気質の一端がうかがえます。オリンピックをむかえても、都市の近代化よりは、むしろ古き良き時代の都市美の再現をめざす都市計画をおし進めていることは、やはり古典主義的傾向を尊重するミュンヘンならではのことといえましょう。

美術の都とよばれるミュンヘンは、同時に音楽の都でもあるのです。その歴史は古く、ルネッサンス時代にまでさかのぼらなければなりません。ゼンフル（Ludwig Senfl 1490年頃～1543）、

そしてルネッサンス音楽をしめくくったラッソー（Orlando di Lasso 1532年頃～1594）が宮廷楽長をつとめたミュンヘンは、当時からヨーロッパ音楽の一大中心地でした。バロック時代に入ると、1653年に宮廷でオペラが試演され、さらに1657年にはドイツで最初の公開歌劇場が開設されるなど、華やかなミュンヘン・オペラが開幕したのです。1753年には、現存する典雅な装飾にいろどられたロココ風のキュビエ劇場（Cuvilliés-Theater）が、フランスの建築家キュビエによって王宮内に完成し、モーツァルトの「にせの花作り女」や「イドメネオ」が初演され、古典派時代のオペラの華麗な歩みがきざまれてゆきました。バイエルン国立歌劇場の前身である宮廷・国立劇場（Hof-und Nationaltheater）が創設されたのは1818年のことですが、ワーグナーを愛したルートヴィヒ2世の登場とともに、ミュンヘン・オペラは黄金時代をむかえます。ハンス・フォン・ビューローが楽長として君臨し、ワーグナーの歌劇がミュンヘンでつぎつぎと初演されました。今日すでに国立歌劇場が100回以上の上演回数を誇る「トリスタンとイゾルデ」は1865年に、「ニュルンベルクのマイスタージンガー」は1868年に初演され、また「指輪」4部作のうち「ラインの黄金」と「ワルキューレ」は、いずれもバイロイトではなく、ミュンヘンではじめて脚光をあびたのでした。これらのミュンヘン・オペラの豊かな伝統が、やがて生粋のミュンヘンの作曲家、リヒャルト・シュトラウスの数々の名作を生み出したといえましょう。国立歌劇場が、モーツァルト、ワグナー、リヒャルト・シュトラウスを3本の柱として、ドイツの中でも最も伝統的なオペラづくりを近年まで固守してきたことは、こうしたミュンヘン・オペラの輝かしい伝統があればこそといえましょう。

オペラとならんで、ミュンヘンのオーケストラ運動の歴史も古く、交響曲の歴史にさんざんと輝くマンハイム楽派をうみだしたカール・テオドール侯が、ミュンヘンに遷都した18世紀末には、現在の国立歌劇場のオーケストラであるバイエルン国立管弦楽団の前身、ミュンヘン宮廷楽団は、すでに愛好家のための演奏会を開いていました。後に、リヒャルト・シュトラウスの父親がホルン奏者として活躍するこのミュンヘン宮廷楽団は、1811年以来、公開の定期演奏会を行なっていますが、やがてこのたび来日するミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の前身、カーム・オーケ

ストラが1893年に誕生し、19世紀末以来、ミュンヘンでは、この二大オーケストラの競演がくりひろげられてゆくこととなるのです。

第2次世界大戦は、歌劇場、演奏会場、教会をつぎつぎと破壊し、ミュンヘンの音楽生活を壊滅状態におとしめてしまいました。しかし、戦後、芸術を愛する市民の努力によって、ミュンヘンの音楽生活は着々と復興していきました。早くも1950年には、ヨーロッパの夏の音楽祭の中心的な祝祭として名高い、伝統あるミュンヘン・オペラ祭も再開されました。1963年には国立歌劇場も再建されて往時の姿をすっかりとりもどし、今や戦前にもまして充実した音楽生活がいとなまれ、バイエルン州の首都ミュンヘンは、南ドイツを代表する音楽都市にたちかえったのです。しかし、多彩をきわめる今日のミュンヘンの音楽生活も、ヨーロッパ文化が常に直面する伝統と現代の相剋を、ここでもくりひろげています。バイエルン国立歌劇場では、優美な舞台づくりを信条とした演出家ハルトマンを総監督に、豊潤な音の世界をくりひろげたカイルベルトを音楽総監督として、古風なまでに伝統を固執した時代は1967年で幕を閉じました。ハルトマンの引退、そして1968年のオペラ祭で「トリスタンとイゾルデ」を振りながら倒れたカイルベルトの劇的な死は、ミュンヘン・オペラに大きな転機をもたらしました。機能主義的な演出をもってドイツ・オペラ界を征服したレンネルトを総監督に、理知的なサヴァリッシュを音楽総監督にむかえた現在の国立歌劇場は、従来の伝統的なオペラづくりを続けながらも、現代感覚あふれる意欲的なオペラ運動も促進し、古都に新たな息吹きをまきおこしています。しかし、レンネルトの新傾向が、必ずしも保守的なミュンヘン市民に全面的に受け入れられているとはいえず、賛否両論にわかれて、ミュンヘン・オペラの未来の姿が激しく論じられているのが現状だといえましょう。

オーケストラの世界へ目を転ずると、永い歴史を誇る国立歌劇場の管弦楽団と、ミュンヘン・フィルハーモニーに加えて、1949年には、強力な財政的基盤をもつバイエルン放送交響楽団が、ヨッフムを指揮者として組織され、ミュンヘンのオーケストラ地図は大きくぬりかえられました。このオーケストラは、1960年には常任指揮者にクーベリックをむかえ、ミュンヘンというよりも、国



際的な色彩の強いオーケストラに成長してしまいました。激動するミュンヘンの楽壇の中で、ひとりミュンヘンの伝統的なひびきを守り続けているのは、やはりこのたび来日するミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団にとどめをさすでしょう。リヒャルト・シュトラウスの良き理解者であったリーガー、そして堅実な演奏を誇るケンペの指揮の下に、第一次大戦後、ブルックナー・オーケストラとして一世をふうびしたミュンヘン・フィルハーモニーの伝統は、今日でも脈々と息づいています。南ドイツならではのたおやかなひびきの背後に古都ミュンヘンを強く感じさせます。

おわりに、ミュンヘン楽壇とわが国との交流をふり返ってみると、国立歌劇場の来演こそまだ実現していませんが、なんと多くのミュンヘンの楽人たちが、すでにわが国を訪れていることでしょう。第2次大戦後、国立歌劇場の音楽総監督として、かつてその重責を一身になったカイルベルトと、これからそれをするようになっていくサヴァリッシュは、ともにNHK交響楽団の名誉指揮者として、われわれには身近かな存在です。バイエルン放送交響楽団は1965年に、またミュンヘンの宗教音楽の分野を代表するカール・リヒターひきいるミュンヘン・パッサ合唱団と管弦楽団は1969年に、それぞれ来日し、すばらしい演奏をきかせてくれました。しかし、今回のミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の来日によって、われわれは、はじめて最も伝統的な古都ミュンヘンのひびきに接することができるのではないのでしょうか。

(慶応義塾大学講師・音楽史)

PROGRAM



札幌 PROGRAM 仙台

札幌 2月2日

SAPPORO

指揮：ヴァーツラフ・ノイマン
ピアノ：ハンス・リヒター・ハーザー

Conductor: Václav Neumann
Piano: Hans Richter-Haaser

1. ハイドンの主題による変奏曲 作品56a=ブラームス
2. ピアノ協奏曲 ニ長調 K. 537「戴冠式」=モーツァルト

I アレグロ
II ラルゲット
III アレグレット

3. 交響曲 第5番 ハ短調 作品67=ベートーベン
I アレグロ コン ブリオ
II アンダンテ コン モート
III アレグロ
IV アレグロ

1. Variations on a Theme of Haydn, op. 56a=Brahms
2. Concerto for Piano and Orchestra, D major K. 537
"Krönungskonzert"=Mozart

I Allegro
II Larghetto
III Allegretto

3. Symphony, no. 5, c minor op. 67=Beethoven
I Allegro con brio
II Andante con moto
III Allegro
IV Allegro

仙台 2月4日

SENDAI

指揮：ヴァーツラフ・ノイマン
チェロ：アンゲリカ・マイ

Conductor: Václav Neumann
Violoncello: Angelica May

1. 交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な
いたずら」作品28=リヒャルト・シュトラウス

2. チェロ協奏曲 ニ長調=ハイドン

I アレグロ モデラート
II アダージョ
III ロンド；アレグロ

3. 交響曲 第6番 ヘ長調 作品68「田園」=ベートーベン

I アレグロ マ ノン トロポ——
いなかに着いたときの愉快的気分
II アンダンテ モルト モッソ——小川のほとり
III アレグロ——いなかの人々の楽しいつどい
IV アレグロ——雷とあらし
V アレグレット——牧歌。あらしのあとの喜びと感謝

1. Till Eulenspiegels lustige Streiche, nach alter Schelmen-
weise—in Rondeau Form, sym. poem, op. 28
=Richard Strauss

2. Concerto for Violoncello and Orchestra, D major
=Haydn

I Allegro moderato
II Adagio
III Rondo ; Allegro

3. Symphony, no. 6, F major op. 68 "Pastorale"
=Beethoven

I Allegro ma non troppo — Erwachen heiterer
Empfindungen bei der Ankunft auf dem Lande
II Andante molto mosso — Szene am Bach
III Allegro — Lustiges Zusammensein der Landleute
IV Allegro — Gewitter, Sturm
V Allegretto — Hirtengesang, frohe und dankbare
Gefühle nach dem Sturm

東京 PROGRAM TOKYO

2月5日

指揮: ヴァーツラフ・ノイマン
ピアノ: ハンス・リヒター・ハーザー

1. 序曲「レオノーレ」第3番=ベートーベン
2. ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 作品58=ベートーベン

I アレグロ モデラート
II アンダンテ コン モート
III ロンド; ヴィヴァーチェ

3. 交響曲 第1番 ハ短調 作品68=ブラームス
 - I ウン ボーコ ソステヌート—アレグロ
 - II アンダンテ ソステヌート
 - III ウン ボーコ アレグレット エ グラチオーソ
 - IV アダージョ—アングロ ノン トロッポ
マ コン ブリオ

Conductor: Václav Neumann
Piano: Hans Richter-Haaser

1. Leonore, overture, no. 3=Beethoven
2. Concerto for Piano and Orchestra, no. 4, G major op. 58=Beethoven

I Allegro moderato
II Andante con moto
III Rondo; Vivace

3. Symphony, no. 1, c minor op. 68=Brahms
 - I Un poco sostenuto—Allegro
 - II Andante sostenuto
 - III Un poco allegretto e grazioso
 - IV Adagio—Allegro non troppo ma con brio

2月6日

指揮: ヴァーツラフ・ノイマン
バイオリン: エディット・パイネマン

1. 交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」作品28=リヒャルト・シュトラウス

2. バイオリン協奏曲 ホ短調 作品64=メンデルスゾーン

I アレグロ モルト アパッショナート
II アンダンテ
III アレグレット ノン トロッポ—
アレグロ モルト ヴィヴァーチェ

3. 交響曲 第6番 ヘ長調 作品68「田園」=ベートーベン

I アレグロ マ ノン トロッポ—
いなかに着いたときの愉快な気分
II アンダンテ モルト モッソ—小川のほとり
III アレグロ—いなかの人々の楽しいつどい
IV アレグロ—雷とあらし
V アレグレット—牧歌。あらしのあとの喜びと感謝

Conductor: Václav Neumann
Violin: Edith Peinemann

1. Till Eulenspiegels lustige Streiche, nach alter Schelmenweise—in Rondeau From, sym, poem, op. 28
=Richard Strauss

2. Concerto for Violin and Orchestra, e minor op. 64
=Mendelssohn

I Allegro molto appassionato
II Andante
III Allegretto non troppo—Allegro molto vivace

3. Symphony, no. 6, F major op. 68 "Pastorale"
=Beethoven

I Allegro ma non troppo—Erwachen heiterer Empfindungen bei der Ankunft auf dem Lande
II Andante molto mosso—Szene am Bach
III Allegro—Lustiges Zusammensein der Landleute
IV Allegro—Gewitter, Sturm
V Allegretto—Hirtengesang, frohe und dankbare Gefühle nach dem Sturm

名古屋 PROGRAM 岡山

名古屋 2月7日

NAGOYA

指揮: ヴァーツラフ・ノイマン
ピアノ: ハンス・リヒター・ハーザー

Conductor: Václav Neumann
Piano: Hans Richter-Haaser

1. ハイドンの主題による変奏曲 作品56a=ブラームス
2. ピアノ協奏曲 ニ長調 K. 537 「戴冠式」=モーツァルト

I アレグロ
II ラルゲット
III アレグレット

3. 交響曲 第5番 ハ短調 作品67=ベートーベン
I アレグロ コン プリオ
II アンダンテ コン モート
III アレグロ
IV アレグロ

1. Variations on a Theme of Haydn, op. 56a=Brahms
2. Concerto for Piano and Orchestra, D major K. 537
"Krönungskonzert"=Mozart

I Allegro
II Larghetto
III Allegretto

3. Symphony, no. 5, c minor op. 67=Beethoven
I Allegro con brio
II Andante con moto
III Allegro
IV Allegro

岡山 2月8日

OKAYAMA

指揮: ハンス・ツェンダー
バイオリン: エディット・バイネマン

Conductor: Hans Zender
Violin: Edith Peinemann

1. 序曲「レオノーレ」 第3番=ベートーベン
2. バイオリン協奏曲 ニ長調 作品61=ベートーベン

I アレグロ マ ノン トロッポ
II ラルゲット
III ロンド; アレグロ

3. 交響曲 第1番 ハ短調 作品68=ブラームス
I ウン ポーコ ソステヌート—アレグロ
II アンダンテ ソステヌート
III ウン ポーコ アレグレット エ グラチオーソ
IV アダージョ—アレグロ ノン トロッポ
マ コン プリオ

1. Leonore, overture, no. 3=Beethoven
2. Concerto for Violin and Orchestra, D major op. 61
=Beethoven
I Allegro ma non troppo
II Larghetto
III Rondo; Allegro
3. Symphony, no. 1, c minor op. 68=Brahms
I Un poco sostenuto — Allegro
II Andante sostenuto
III Un poco allegretto e grazioso
IV Adagio — Allegro non troppo ma con brio

高松 PROGRAM 松山

高松 2月9日

TAKAMATSU

指揮: ハンス・ツェンダー
ピアノ: ハンス・リヒター・ハーザー

Conductor: Hans Zender
Piano: Hans Richter-Haaser

1. ハイドンの主題による変奏曲 作品56a=ブラームス
2. ピアノ協奏曲 ニ長調 K. 537「戴冠式」=モーツァルト

I アレグロ
II ラルゲット
III アレグレット

3. 交響曲 第7番 イ長調 作品92=ベートーベン

I ポーコ ソステヌート—ヴィヴァーチェ
II アレグレット
III プレスト—アッサイ メーノ プレスト
IV アレグロ コン プリオ

1. Variations on a Theme of Haydn, op. 56a=Brahms
2. Concerto for Piano and Orchestra, D major K. 537 "Krönungskonzert"=Mozart

I Allegro
II Larghetto
III Allegretto

3. Symphony, no. 7, A major op. 92=Beethoven

I Poco sostenuto—Vivace
II Allegretto
III Presto—Assai meno presto
IV Allegro con brio

松山 2月11日

MATSUYAMA

指揮: ヴァーツラフ・ノイマン
バイオリン: エディット・パイネマン

Conductor: Václav Neumann
Violin: Edith Peinemann

1. 交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」作品28=リヒャルト・シュトラウス

2. バイオリン協奏曲 ホ短調 作品64=メンデルスゾーン

I アレグロ モルト アパッショナート
II アンダンテ
III アレグレット ノン トロッポ—
アレグロ モルト ヴィヴァーチェ

3. 交響曲 第6番 ヘ長調 作品68「田園」=ベートーベン

I アレグロ マ ノン トロッポ—
いなかに着いたときの愉快な気分
II アンダンテ モルト モッソ—小川のほとり
III アレグロ—いなかの人々の楽しいつどい
IV アレグロ—雷とあらし
V アレグレット—牧歌。あらしのあとの喜びと感謝

1. Till Eulenspiegels lustige Streiche, nach alter Schelmenweise—in Rondeau Form, sym. poem, op. 28 =Richard Strauss

2. Concerto for Violin and Orchestra, e minor op. 64 =Mendelssohn

I Allegro molto appassionato
II Andante
III Allegretto non troppo—Allegro molto vivace

3. Symphony, no. 6, F major op. 68 "Pastorale" =Beethoven

I Allegro ma non troppo—Erwachen heiterer Empfindungen bei der Ankunft auf dem Lande
II Andante molto mosso—Szene am Bach
III Allegro—Lustiges Zusammensein der Landleute
IV Allegro—Gewitter, Sturm
V Allegretto—Hirtengesang, frohe und dankbare Gefühle nach dem Sturm

福岡 PROGRAM 北九州

福岡 2月13日

FUKUOKA

指揮: ヴァーツラフ・ノイマン
ピアノ: ハンス・リヒター・ハーザー

Conductor: Václav Neumann
Piano: Hans Richter-Haaser

1. ハイドンの主題による変奏曲 作品56a=ブラームス
2. ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 作品58=ベートーベン
 - I アレグロ モデラート
 - II アンダンテ コン モート
 - III ロンド; ヴィヴァーチェ
3. 交響曲 第7番 イ長調 作品92=ベートーベン
 - I ポーコ ソステヌート——ヴィヴァーチェ
 - II アレグレット
 - III プレスト——アッサイ メーノ プレスト
 - IV アレグロ コン ブリオ

1. Variations on a Theme of Haydn, op. 56a=Brahms
2. Concerto for Piano and Orchestra, no. 4, G major op. 58=Beethoven
 - I Allegro moderato
 - II Andante con moto
 - III Rondo; Vivace
3. Symphony, no. 7, A major op. 92=Beethoven
 - I Poco sostenuto — Vivace
 - II Allegretto
 - III Presto — Assai meno presto
 - IV Allegro con brio

北九州 2月14日

KITAKYUSHU

指揮: ハンス・ツェンダー
ピアノ: ハンス・リヒター・ハーザー

Conductor: Hans Zender
Piano: Hans Richter-Haaser

1. 序曲「レオノーレ」 第3番=ベートーベン
2. ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73「皇帝」
=ベートーベン
 - I アレグロ
 - II アダージョ ウン ポーコ モッソ
 - III ロンド; アレグロ
3. 交響曲 第1番 ハ短調 作品68=ブラームス
 - I ウン ポーコ ソステヌート——アレグロ
 - II アンダンテ ソステヌート
 - III ウン ポーコ アレグレット エ グラチオーソ
 - IV アダージョ——アレグロ ノン トロッポ
マ コン ブリオ

1. Leonore, overture, no. 3=Beethoven
2. Concerto for Piano and Orchestra, no. 5, E flat major op. 73, "Emperor"=Beethoven
 - I Allegro
 - II Adagio un poco mosso
 - III Rondo; Allegro
3. Symphony, no. 1, c minor op. 68=Brahms
 - I Un poco sostenuto — Allegro
 - II Andante sostenuto
 - III Un poco allegretto e grazioso
 - IV Adagio — Allegro non troppo ma con brio

広島 PROGRAM 大阪

広島 2月15日

HIROSHIMA

指揮：ヴァーツラフ・ノイマン
チェロ：アンゲリカ・マイ

Conductor: Václav Neumann
Violoncello: Angelica May

1. 交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な
いたずら」作品28＝リヒャルト・シュトラウス

1. Till Eulenspiegels lustige Streiche, nach alter Schelmen-
weise — in Rondeau Form, sym. poem, op. 28
＝Richard Strauss

2. チェロ協奏曲 ニ長調＝ハイドン

2. Concerto for Violoncello and Orchestra, D major
＝Haydn

- I アレグロ モデラート
II アダージョ
III ロンド；アレグロ

- I Allegro moderato
II Adagio
III Rondo ; Allegro

3. 交響曲 第6番 ヘ長調 作品68「田園」＝ベートーベン

3. Symphony, no. 6, F major op. 68 "Pastorale"
＝Beethoven

- I アレグロ マノン トロップ——
いなかに着いたときの愉快な気分
II アンダンテ モルト モッソ——小川のほとり
III アレグロ——いなかの人々の楽しいつどい
IV アレグロ——雷とあらし
V アレグレット——牧歌。あらしのあとの喜びと感謝

- I Allegro ma non troppo — Erwachen heiterer
Empfindungen bei der Ankunft auf dem Lande
II Andante molto mosso — Szene am Bach
III Allegro — Lustiges Zusammensein der Landleute
IV Allegro — Gewitter, Sturm
V Allegretto — Hirtengesang, frohe und dankbare
Gefühle nach dem Sturm

大阪 2月16日

OSAKA

指揮：ヴァーツラフ・ノイマン
ピアノ：ハンス・リヒター・ハーザー

Conductor: Václav Neumann
Piano: Hans Richter-Haaser

1. 序曲「レオノーレ」第3番＝ベートーベン

1. Leonore, overture, no. 3＝Beethoven

2. ピアノ協奏曲 第5番 変木長調 作品73「皇帝」
＝ベートーベン

2. Concerto for Piano and Orchestra, no. 5, E flat
major op. 73, "Emperor"＝Beethoven

- I アレグロ
II アダージョ ウン ポーコ モッソ
III ロンド；アレグロ

- I Allegro
II Adagio un poco mosso
III Rondo ; Allegro

3. 交響曲 第2番 ニ長調 作品73＝ブラームス

3. Symphony, no. 2, D major op. 73＝Brahms

- I アレグロ ノン トロップ
II アダージョ ノン トロップ——リステツ テンポ
マ グラチオーソ
III アレグレット グラチオーソ(クワジ アンダンティーノ)
プレスト マ ノン アッサイ
IV アレグロ コン スピリット

- I Allegro non troppo
II Adagio non troppo — L'istesso tempo, ma grazioso
III Allegretto grazioso (Quasi Andantino)
Presto ma non assai
IV Allegro con spirito

PROGRAM



■チェロ協奏曲 ニ長調＝ハイドン

1783年ごろ、ハイドン（1732—1809）が51才のとき、エステルハージ公の管弦楽団とそこのチェリストのアントン・クラフトのために作曲したものです。十数年前までは疑作とみなされていましたが、後にウィーンでハイドンの直筆の楽譜が発見されて真作と承認されました。

楽器編成は、独奏チェロと管弦楽がオーボエ2、ホルン2および弦5部ですが、近代ではフルート2、クラリネット2、ファゴット2を加えて演奏することも多くなりました。

明るく、典雅な作品で、今日ではドヴォルザークのチェロ協奏曲などとともに、しばしば演奏される名曲の一つとなっています。

3楽章からなり、第1楽章はアレグロ・モデラート、ニ長調 4分の4拍子で、バイオリンの奏するなごやかな第1主題にはじまり、ついで、バイオリンと木管とで、イ長調の同じく歌うような第2主題が出ます。この2つの主題はあまり対立的ではなく、むしろ調和的です。したがって、個性的な第1主題が第1楽章では中心となっています。展開、再現を経て、華やかなカデンツァの後、短い管弦楽の総奏で終わります。

第2楽章はアダージョ、イ長調 4分の2拍子で、独奏チェロの奏するのびのびとした旋律にはじまって、それにホ長調の柔らかな副旋律や、ハ長調の旋律を加えながら明るく進みます。抒情味にあふれる魅力的な歌謡楽章です。

第3楽章はアレグロ、ニ長調 8分の6拍子で、ロンドと記されています。独奏チェロが踊るような軽快な主題を奏して始まり、その明るい気分が楽章全体に流れます。イ長調の2つの副主題を加えて、その間に独奏チェロが輝かしい技巧を示すニ短調のやや淋しい部分があり、やがて再び明るいニ長調にもどって輝かしい結尾となります。

■ピアノ協奏曲 ニ長調 K. 537「戴冠式」＝モーツァルト

1788年、モーツァルト（1756—1791）が32才の作。1790年のフランクフルトにおけるレオポルド二世即位の戴冠式のとき、モーツァルトが自らピアノを弾いて演奏したので「戴冠式」の名が与えられました。作曲はウィーンで行なわれました。

楽器編成は、独奏ピアノと管弦楽がフルート 1，オーボエ 2，ファゴット 2，ホルン 2，トランペット 2，ティンパニー，弦 5 部で、クラリネットは使われていません。

戴冠式の式典にふさわしく、華やかさのなかに落ちつきと統一があり、とくに技巧的に目立ったところはありませんが、ピアノと管弦楽の効果がしっくりとしているので、ニ短調 K 466 や、イ長調 K 488 とともに、モーツァルトのピアノ協奏曲中、もっとも演奏される機会の多い作品となっています。

第 1 楽章はアレグロ，ニ長調 4 分の 4 拍子で、第 1 バイオリンの奏する気品のある第 1 主題によって始まり、ついで同じく第 1 バイオリンが原調によるのびのびとした第 2 主題を奏します。その後でピアノが第 1 と第 2 主題をそのままの形で奏して進み、展開・再現と形通りに行なわれ、カデンツァを経て、華やかに終わります。

第 2 楽章はラルゲット，イ長調 2 分の 2 拍子で、ロマンスともいべき曲趣です。ピアノが独り物語るようにひきはじめ、管弦楽がそれを反復して進みます。そして和声的に変化の多い中間部を経て、はじめの部分が再現されます。この中間部は原調のままなのが変っているし、また最後のコードは大変印象的です。

第 3 楽章はアレグレット，ニ長調 4 分の 2 拍子です。ロンド風の軽快な曲で、ピアノがひき出すロンド主題は、3 回反復されます。ここのピアノと管弦楽との融合はまことに美しく、ピアノの技巧的効果も輝かしいものです。

■序曲「レオノーレ」第 3 番＝ベートーベン

ベートーベン（1770—1827）は、歌劇はただ一曲「フィデリオ」を作曲しただけですが、それにつける序曲は 4 曲も書いています。1 つは「フィデリオ」序曲で、他の 3 曲はいずれも「レオノーレ」の名で呼ばれる、第 1 番から第 3 番までの 3 つの序曲です。これらのうち、今日歌劇の上演にあたっては、「フィデリオ」序曲を最初に演奏し、次に、この序曲「レオノーレ」第 3 番を、第 2 幕の前か、第 2 幕第 2 場で演奏するのが慣例となっているようです。

ところで、この序曲「レオノーレ」第 3 番は、4 つの序曲中もっともすぐれた作品として、演奏会において単独で演奏される機会の最も多い作品です。

この曲は歌劇の筋を追うとともに、ソナタ形式としても統一のとれた音楽作品となっています。1806 年、ベートーベンが 36 才の時の作品です。

楽器編成は、フルート 2，オーボエ 2，クラリネット 2，ファゴット 2，ホルン 4，トランペット 2，トロンボーン 3，ティンパニー，弦 5 部で、アダージョ，ハ長調 4 分の 3 拍子の序奏で始まります。この中でクラリネットとファゴットの歌う変イ長調の旋律は、フロレスタンが第 2 幕で歌う有名なアリア「人の世の春に」によるものです。

アレグロ，ハ長調 2 分の 2 拍子の主部に入ると、第 1 バイオリンとチェロとが最弱音で第 1 主題を奏し、ついでフルートと第 1 バイオリンとがハ長調の第 2 主題を奏します。これもフロレスタンのアリアをもととしたものですが、展開部の中で突如として舞台裏からトランペットのファンファーレが 2 度響きます。大臣の到着。つまり悪がさばかれ正義が実現されることを象徴する劇的な部分です。そして歓喜にみちた再現から終結に進み、まことに壮大な、息詰まるようなクライマックスに達して曲を終わります。

■交響曲 第5番 ハ短調 作品67=ベートーベン

ベートーベン、38才の1808年の作品です。タタタターという4つの音からなる冒頭の動機について、「運命が戸をたたく」とベートーベンが自ら説明した、と弟子のシントラーは伝えています。これが「運命交響曲」の名が与えられた由来です。

ベートーベンが、1803年から1808年にかけて約5年にわたって推こみを重ねた末に生まれた力作です。

楽器編成は、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニー、弦5部で、第4楽章では、さらにピッコロ1、コントラファゴット1、トロンボーン3が加えられ、一段と豊かなひびきで凱歌のフィナーレが奏されます。

第1楽章はアレグロ・コン・ブリオ、ハ短調 4分の2拍子で、クラリネットと弦楽合奏とがユニゾンで奏する運命の動機にはじまり、ついでホルンが変ホ長調の第2主題を力強く奏します。その主題のはじめの部分は運命の動機そのものです。展開・再現と運命の動機がいくたびかあらわれ、非常に長いコードをもって雄大に曲を結びます。

第2楽章はアンダンテ・コン・モート、変イ長調 8分の3拍子で自由な変奏曲です。チェロとビオラのユニゾンによるおだやかな主題に始まり、やがて3つの変奏がつづきます。次第に高潮し、最後に主題を高らかに奏して終わります。

第3楽章はアレグロ、ハ短調 4分の3拍子、チェロとコントラバスとの奏する力強い低音の動機に始まります。これは「幽霊の動機」ともいわれますが、それに運命の動機が加わります。対位的なトリオを経て、やがて長い保続音とともに、第4楽章、アレグロ、ハ長調 4分の4拍子につづき、勝利の凱歌ともいべき第1主題が高らかに響きわたります。なかに第3楽章の回想も加わり、その後、壮大なコードで曲を終わります。

■交響曲 第6番 ヘ長調 作品68「田園」=ベートーベン

第5番「運命」とこの「田園」とは切り離すことのできない関係にあります。ベートーベンが第5番の完成の前にこの「田園」の作曲をはじめました。1808年、ベートーベン38才の夏のこと、かつて彼が自殺をも考えたハイリゲンシュタットで作曲されました。

この曲は5楽章から成り、各楽章に標題がつけられているので、標題交響曲の先駆とみなされています。

楽器編成はフルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニー、弦5部で、ピッコロとティンパニーが用いられるのは、あらしを描写した第4楽章のみです。すでにベートーベンが耳が不自由であったために、人々との交際をさけて自然のなかを散策しながら想を練り、また作曲を進めました。したがって、これはかれの自然観と自然への感謝をあらわした作品だといってよいでしょう。

第1楽章、アレグロ・マ・ノン・トロppo、ヘ長調 4分の2拍子「いなかに着いたときの愉快的気分」。素朴なオーストリア南部の民謡を主題としてはじまり、小鳥のさえずりも加わって、初夏の田園の明るい気持をみごとに表現しています。

第2楽章、アンダンテ・モルト・モッソ、変ロ長調 8分の12拍子「小川のほとり」。一貫して流れゆく小川のささやきがつづき、終わり近く「うぐいす」(フルート)「うずら」(オーボエ)「かっこう」(クラリネット)の鳴き声が、描写されています。

第3楽章、アレグロ、ヘ長調 4分の3拍子「いなかの人々の楽しいつどい」。

第4楽章、アレグロ、ヘ短調 4分の4拍子「雷とあらし」では、ともに、オーケストラを駆使した克明な描写が行われ、切れ目なく、第5楽章、アレグレット、ヘ長調 8分の6拍子「牧歌。あらしのあとの喜びと感謝」につづきます。ここでは人間と自然との調和を高らかに讃美して、全曲を終わります。

■交響曲 第7番 イ長調 作品92=ベートーベン

1812年、ベートーベンが42才の時の作品で、第6番「田園」から4年後に完成しました。そのころのウィーンはナポレオン軍に占拠され、それによる経済上の不安も加わり、その上ベートーベン自身は耳の状態がさらに悪化し、テレーゼ・ブルンスウィックとの婚約にも破れ、まさに苦悩のどん底にありました。しかし、常に運命とたたかって生きぬいたベートーベンは、こうした苦境にありながら、この第7交響曲のような雄こんな作品を残したのでした。

この曲を、リストが「リズムの神化」といい、ワグナーが「舞踏の神化」と呼んだのは、全曲にあふれるリズムの生命力によるもので、まことに至言というべきでしょう。

楽器編成は、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニー、弦5部です。

第1楽章、ポーコ・ソステヌート・ヴィヴァーチェ、イ長調、4分の4拍子の非常に長い序奏ではじまり、次いで8分の6拍子の主部に入って、軽快な舞曲風の第1主題をまずフルートが奏し、ついでホ長調のきわめて快活な第2主題をフルート第1バイオリンが奏します。付点リズムの躍動的な流れがこの楽章を特長づけています。

第2楽章、アレグレット、イ短調 4分の2拍子。暗く詠歎的な行進曲調で、低音の弦楽器が提示する主題を変奏させて、しだいに盛りあげてゆくところは、思わずひきこまれてしまいます。イ長調の中間部はクラリネットとファゴットではじまる純朴な旋律により、再現は変って対位法的に構成されています。

第3楽章、プレスト、ヘ長調 4分の3拍子。トリオを2回はさんで主部が3回あらわれるスケルツォです。

第4楽章、アレグロ・コン・ブリオ、イ長調 4分の2拍子。強烈な色彩に輝く、バッカスの乱舞ともいうべき終曲です。

■ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 作品58=ベートーベン

1806年、ベートーベンが36才の時の作品で、ピアノ・ソナタ「ワルトジュエタイン」や「熱情」を、また交響曲では第5番と第6番とを書いた円熟期のピアノ協奏曲です。

ベートーベンはこの曲で、彼の個性ともいえるべき威圧感から解放されており、むしろ静寂でゆとりのある境地をゆうゆう自適して楽しんでいるかのようです。

楽器編成は、独奏ピアノと管弦楽がフルート1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニー、弦5部で、第1楽章ではトランペットとティンパニーは使われず、第2楽章の管弦楽は弦楽器のみという静かなものです。

第1楽章、アレグロ・モデラート、ト長調 4分の4拍子。古典の慣例を破って、まずピアノがひとりで第1主題を弾き始めます。徐々に音量をまして最強音に達し、急に弱音になって第2主題が第1バイオリンで奏されます。透徹した清らかな旋律です。展開ではピアノが華やかな技巧を駆使し、再現もまたピアノが主役となって進みます。ベートーベン自身が作ったカデンツァの後、力強い結尾で終わります。

第2楽章、アンダンテ・コン・モート、ホ短調 4分の2拍子では、ピアノは終始弱音ペダルを用い、管弦楽は弦楽器のみで、まず、厳粛な主要旋律がユニゾンで奏されます。ついでピアノが単独にモルト・カンタービレの清純な旋律を歌い出し、管弦楽とピアノとの静かな会話がくりかえされ、ピアノのカデンツァがあって静かに終わります。

第3楽章、ロンド；ヴィヴァーチェ、ト長調 4分の2拍子。弦楽器のみによるロンドの主題が静かに始められ、ピアノがそれを変奏しながら進みます。ニ長調の副次主題を加えて進み、短かなカデンツァの後、一気にプレストとなって曲を終わります。

■ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73「皇帝」

＝ベートーベン

ベートーベンが38才から39才にかけての1808年から9年にわたって作曲されました。彼の5曲のピアノ協奏曲の最後を飾る大作で、けんらん豪華であるとともにロマン的な詩情もあり、またピアノの名人芸もひれきされる雄大な協奏曲です。

この曲が「皇帝」と呼ばれるのは、堂々とした曲想と構成に由来するもので、ある特定の皇帝に関連して名づけられたものではありません。ベートーベンが、この曲を、ウィーンが再びナポレオン軍の攻撃を受けたとき、その砲声を聞きながら作曲したと伝えられています。騒然たる状況の下にありながら、このような大曲を完成したベートーベンの精神力の偉大さには、改めて感心させられます。

楽器編成は、独奏ピアノと管弦楽がフルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニー、弦5部で、第2楽章ではトランペットとティンパニーは用いられません。

第1楽章、アレグロ、変ホ長調 4分の4拍子は、管弦楽の力強い和音につづいて、ピアノ即興風のカデンツァによって開始され、その後、堂々たる第1主題を管弦楽が奏し、また、変ホ長調の抒情的な第2主題も同じく管弦楽によってあらわれます。その後でピアノが第1・第2主題を奏して、展開・再現へと進みます。再現の後にベートーベン自身の手による短かいカデンツァ風の部分を経て長いコーダに入ります。

第2楽章、アダージョ・ウン・ボーコ・モッソ、ロ長調 4分の4拍子は、やさしく美しい自由な変奏曲形式で、切れ目なしに第3楽章、ロンド；アレグロ、変ホ長調 8分の6拍子につづきます。ピアノによる明快なロンド主題にはじまり、舞曲風に進展し、けんらんたる終曲をつくりあげています。

■バイオリン協奏曲 ニ長調 作品61＝ベートーベン

1806年、ベートーベンが有名なバイオリニストのクレメントのために作曲したもので、ベートーベンが36才の時の作品です。ベートーベンの唯一のバイオリン協奏曲で、メンデルスゾーンやブラームスのバイオリン協奏曲とともに、バイオリンの魂をしっかりとつかんだ名曲だといえましょう。ベートーベンはこの協奏曲を作曲するまでに、すでに9曲のバイオリン・ソナタを書いており、また管弦楽伴奏のバイオリン曲、2つのロマンスも作曲していたので、バイオリンには精通していたものと思われます。しかし、この協奏曲のカデンツァは、自身では書きこなせなかったようで、今日では、ヨアヒム、アウアー、クライスラーのカデンツァがよく演奏されます。

楽器編成は、独奏バイオリンと管弦楽がフルート1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニー、弦5部で、第2楽章ではフルート、オーボエ、トランペット、ティンパニーは用いられません。

第1楽章、アレグロ・マ・ノン・トロッポ、ニ長調 4分の4拍子。ティンパニーの独奏に導かれて、木管楽器による、おだやかな、しかし、雄大な趣きの第1主題が奏されます。ついでこの上なく旋律の美しい第2主題が同じく木管楽器で奏された後に、独奏バイオリンが登場します。両主題ともバイオリンの美しさを十分に発揮するように作られているので、きわめて効果的です。カデンツァを経て、第2主題が静かに印象的に奏されるコーダに続きます。

第2楽章、ラルゲット、ト長調 4分の4拍子。コラール風の主題による3つの変奏からなる抒情曲で、カデンツァの後、そのまま第3楽章、ロンド；アレグロ、ニ長調 8分の6拍子に入ります。舞曲風の明朗なロンド主題は4回あらわれ、その間にイ長調とト短調の副次主題が介在して、正規のロンド形式のうちに、豊かな曲想がくりひろげられています。

■バイオリン協奏曲 ホ短調 作品64＝メンデルスゾーン

メンデルスゾーン(1809—1847)のバイオリン協奏曲は、有名なこのホ短調1曲しかないと考えられていたが、1951年にユードイ・メニューインが、ロンドンのメンデルスゾーンの子孫の家からニ短調のバイオリン協奏曲を発見して、現在では2曲となりました。しかし、その内容からして革新的なのは、このホ短調の曲の方です。

1844年、メンデルスゾーンが35才の時の作品で、当時ライプチヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターであったダヴィットのために作曲されたもので、ダヴィットの独奏で初演されました。

楽器編成は、独奏バイオリンと管弦楽が、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニー、弦5部で全曲3楽章が連続して演奏されます。しかも、3つの楽章は、それぞれ個性的な魅力をそなえているのです。

第1楽章、アレグロ・モルト・アパッショナート、ホ短調 2分の2拍子は弦楽器の分散和音にはじまって、それに乗って独奏バイオリンが優美な第1主題を歌い出します。ついでト長調の優雅な第2主題をフルートとクラリネットが奏し、独奏バイオリンに渡します。展開の中でメンデルスゾーン自身の作になるカデンツァが奏され、ついで再現に移り、しだいに高潮を加えて速度も増し、情熱的な終結に達します。しかし、終止和音で結ばずに、転調して、そのまま第2楽章、アンダンテ、ハ長調 8分の6拍子に入って、バイオリンは、いかにも甘美で抒情味のある旋律を歌います。そして、中間部では独奏バイオリンの重音と32分音符の音型が、ゆれうごくような細やかな情緒をかもし出しています。切れずにつづく第3楽章、アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ、ホ長調 4分の4拍子は、まことにはつらつたる第1主題で始まり、ロ長調の第2主題とともに生氣躍動する軽快な曲趣のうちに全曲を終わります。

■交響曲 第1番 ハ短調 作品68＝ブラーム

ブラームス(1833—1897)は最初の交響曲を1876年、彼が43才のときに作曲しました。ベートーベンを非常に尊敬していたブラームスは、ベートーベンの9つの交響曲に加えるべきものがあろうかと考えて、交響曲の作曲には慎重にならざるをえなかったのです。

ブラームスとベートーベンとの親密さを考えると、この第1番のとくに第1楽章が、ベートーベン流の基本動機でできていることや、また終楽章の主題がベートーベンの第9交響曲の「歓喜の主題」を思わせるのは、まことに当然のことと言えましょう。ブラームスがこの第1番の第1楽章を書きはじめたのは、23才のときであったといわれていますから、実に完成まで20年も考えつづけていたことになります。

楽器編成は、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニー、弦5部です。

第1楽章、ウン・ボーコ・ソステヌート——アレグロ、ハ短調 8分の6拍子は、力を凝集した長い序奏にはじまり、とくにその堂々たる主題はこの曲の基本動機となっています。速い主部は、ゆったりとした序奏と対照的に力強く、オーボエの吹く第2主題は憂いを感じさせるやさしい旋律ですが、それも長くはつづかず、すぐに激しい闘争がくりひろげられ、展開・再現を経て、あこがれをこめた第1主題で終わります。

第2楽章、アンダンテ・ソステヌート、ホ長調 4分の3拍子は、ブラームス特有の悲劇的な暗さをもっており、わびしく、嘆息するようなバイオリンとファゴットの第1主題はとくに印象的です。

第3楽章、ウン・ボーコ・アレグレット・エ・グラチオーソ、変イ長調 4分の2拍子。明るいロ長調のトリオをもつ典雅な曲。

第4楽章、アダージョ、ハ短調。アレグロ・ノン・トロツボ・マ・コン・ブリオ、ハ長調 4分の4拍子。堂々たる序奏で始まり、アルプスのホルンを思わせる旋律が聞えます。そして主部に入って、ベートーベンの「歓喜の主題」を思わせる民謡風の旋律が洋々と奏されて、輝かしい終曲となります。

■交響曲 第2番 ニ長調 作品73＝ブラームス

1877年、ブラームスが44才のときの作品で、交響曲第1番の直後に着手し、その翌年に風光明媚なヴェルター湖畔のペルチャッハで作曲されました。したがって、第1番が運命とか闘争とか、また悲劇的とかの激しい内容をもっているのに反して、第2番は自然を愛するブラームスののびのびとした性格の一面がはっきりとでています。そのためにブラームスの田園交響曲とも呼ばれています。

楽器編成は、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニー、弦5部です。

第1楽章、アレグロ・ノン・トロppo、ニ長調 4分の3拍子はチェロとコントラバスとの導く動機ではじまります。この3つの音からなる動機はこの楽章ばかりではなく、第3、第4楽章でも重要な要素となっています。嬰へ短調の第2主題を、ビオラとチェロとが奏し、ついで第1主題を中心とした展開の後、再現され、かなり長い終結部があって、この楽章を終わります。

第2楽章、アダージョ・ノン・トロppo、ロ長調 4分の4拍子は、はじめに出るチェロの下降する旋律からして、物悲しいもので、ブラームスの孤独とわびしさを示していて、重苦しい雰囲気の人々をひきこむようです。木管による第2主題はやや明るいものですが、それとても過去の思い出ともとれるさびしさを宿しています。

第3楽章、アレグレット・グラチオーソ（クワジ・アンダンティーノ）、ト長調 4分の3拍子は、無邪気と評したいほどの素朴で楽しい内容で、ユーモラスな感じさえもっています。

第4楽章、アレグロ・コン・スピリット、ニ長調 2分の2拍子は、元気で快活な第1主題、明るくおだやかな第2主題による歓喜の楽章で、第1主題は第1楽章のはじめの基本動機の発展したものです。

■ハイドンの主題による変奏曲 作品56a＝ブラームス

1873年、ブラームスが40才の夏に、ミュンヘン南方の風光明媚なシュタルンベルク湖畔のトゥッツィンクというところで完成したもので、筆を途中でおいままになっていた第1交響曲に、再びとりかかる前の小手しらべとして、この曲を完成したものだと思われます。ブラームスがここで用いた主題は、ハイドンの「聖アントニーのコラール」からとったもので、これが8回変奏され、最後にパッサカリア風の壮大な終曲で曲を終ります。ベートーベンと並んで変奏曲の大家と称されたブラームスにふさわしい名作です。

楽器編成は、ピッコロ1、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット2、ティンパニー、トライアングル、弦5部で、まず、アンダンテ、変ロ長調 4分の2拍子の主題が奏されます。

（次のページの楽譜を参照。）

第1変奏、ポーコ・ビウ・アニマートは、二重対位法を中心としての変奏。

第2変奏、ビウ・ヴィヴァーチェは、変ロ短調でやや暗く、木管楽器が中心となります。

第3変奏、コン・モートは、再び長調にもどって対位法の目立つのどかな変奏。

第4変奏、アンダンテ・コン・モートは、再び変ロ短調、8分の3拍子のさびしい緩徐楽章。

第5変奏、ヴィヴァーチェは、長調にもどって8分の6拍子のスケルツォ風の曲。

第6変奏、ヴィヴァーチェは4分の2拍子。生き生きとしたリズムカルな変奏。

第7変奏、グラチオーソは8分の6拍子。優雅な田園風の曲。

第8変奏、プレスト・ノン・トロppoは、短調で神秘的な雰囲気風の曲。

終曲のアンダンテは、バスに出る主題が常に繰り返えされてゆく中で、さまざまな変化がくりひろげられる壮大なパッサカリア。堂々たるもり上りのうちに全曲を終ります。

■交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」 作品28＝リヒャルト・シュトラウス

リヒャルト・シュトラウス（1864—1949）は、この曲に「昔のならずものの物語によるロンド形式の大管弦楽のためのもの」と副題をつけています。

ティル・オイレンシュピーゲルは、14世紀に放浪生活を送ったドイツのいたずらもので、実在した人物だという説もあり、また全く架空の人物だという説もありますが、その人物論はともかくとして、リヒャルト・シュトラウスは数々の親しみやすい主題を素材とし、巧みな管弦楽法の技巧を縦横に発揮して、典型的な交響詩を作りあげました。1895年、彼が31才のときの作品です。

楽器編成は大規模な四管編成で、ピッコロ1、フルート3、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット3、バス・クラリネット1、ファゴット3、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニー、シンバル、トライアングル、大太鼓、小太鼓、大きいラットル、弦5部です。

短い序奏の後にホルンがティルの主題を示し、つづいて、クラリネットが「いたずらの動機」と呼ばれる楽しい主題を示します。この2つの主題が、ティルのさまざまないたずらの描写の中心となっており、まず、第1のいたずらは、馬で市場に乗りこみ、女子供が逃げまどい、器物のこわれる様子が描かれます。第2のいたずらは、僧衣をつけて、伝道師に化けますが、その固苦しさに閉口してしまいます。

その後、騎士となって美女に恋し、肘鉄砲を食わされたり、学者たちと論争して、ついに及ばずして逃げ出したり、音楽は次第に緊張の度をまして、やがて、クライマックスに達し、ついにティルは裁きをうけて、絞首台の上で生命を断たれることとなります。

静かなエピローグが悲劇的な結末を告げた後、全管弦楽の強奏で「いたずらの動機」が奏されて、暗示的に曲を終わります。

「聖アントニーのコラール」



わがふるさとミュンヘン

ディートリッヒ・モルク・ウーデ

4年前に、私がはじめて日本へやって来たとき、私のふるさとミュンヘンが、日本の人たちに大変よく親しまれていることを知りました。その理由は、どうやら、有名なミュンヘンビールにあるようで、ここでは「ミュンヘン・サッポロ・ミルウォーキー」という言葉で、よいビールの筆頭にあげられているわけです。しかし、数年前ローマでの IOC 総会が1972年のオリンピックをミュンヘンで開催することにきめたのは、この有名なミュンヘンビールのおかげではなかったようです。ともかく、私もミュンヘン市民は、ミュンヘンでオリンピックが開かれることがきまったときから以来今日まで、このことを大変誇りに思っています。今や日本でも、オリンピックの街ミュンヘンの名声が、ビールの街ミュンヘンの名声よりも上まわっているようで、このことに私は大きな喜びを感じています。

ところで、このオリンピックの街ミュンヘンは偶然に生まれたものではありません。今から1000年以上も前に、現在の100万都市ミュンヘンがある場所に、数人の「修道士」(Mönche)が住みつきしました。人々はこれを「修道士の村」という意味で、ムニヒェン(Munichen)と呼んだのですが、その後ムニヒェンがミュンヘン(München)に変わったのです。現在、ミュンヘン市の紋章は、こどもの姿だとされていますが、これは昔の僧衣を着た修道士に由来するものなのです。小さな村にすぎなかったムニヒェンは、近くのパート・ライヒェンハルやハラインから、当時は大変高価だった岩塩が発見され、人々は遠くヨーロッパの西部や北部へ運び出される塩に対して、イーザル川にかけられた木の橋の上で関税を取ることができたので、急速に発展しました。この関税は、ちょうど今日の東京の高速道路の料金のようなものですが、ミュンヘンにとって立派な収入となり、その結果今から814年前の1158年の6月14日に、正式にミュンヘン市が誕生したのです。

そして、その後の数世紀の間に、ミュンヘンは高い城壁で囲まれた典型的な中世都市となりました。城壁は、今もいくつか残されている大きな門で外に通じているのみで、この門は外部からの襲撃に備えて、夜は閉鎖されました。一部分は中世のはじめに、その他は中世の終り頃造られた数多くの荘麗な建築物、王宮、城、教会などをひとつひとつ紹介することは、ここではとてもできませんが、数年前にできた近代的な290mのテレビ塔を別とするならば、ミュンヘンの目印としては、遠くからでもはっきりと眺めることのできる「聖母マリア教会」^{リープツタウエン・ドーム}をあげなくてはならないでしょう。15世紀の終り頃建てられたこの古いゴシック様式の教会は、ふたつの塔をもち、ひとつは99m、もうひとつは100mの高さで、平地にくっきりとそびえたつ様子を遠くからでも眺めることができます。第2の目印としては、1181年に建てられた「聖ペテロ教会」^{ツッファールキルヒェン・ザンクト・ペーター}で、これをミュンヘンの人々は「年とったペーター」^{グア・アルテ・ペーター}と呼んで親しんでいます。

よく晴れた「フェーン」現象の日に(「フェーン」とは、アルプスの北に位置するミュンヘン特有の、すみきった大変視界のきくお天気で、人によっては頭痛がするといひ、人によっては都合の悪いことは何でも「フェーン」のせいにして、いいのがれをすることができるといったお天気です。)、^{ツッファールキルヒェン・ザンクト・ペーター}「聖母マリア教会」の南側の塔に登ってミュンヘンの街を眺めると、100kmもはなれているアルプスの山なみや、数多くの美しいバイエルンの湖が手にとるようにはっきりと見えます。東京とちがって、都市の境目ははっきりと見分けられる大変すばらしい眺めです。

ミュンヘン見物の楽しさとして、夏の宵に繁華街のレオポルト通りをぶらついて、シュワービングへ行ってみることも、ぜひおすすめします。ここでは、現状に満足したのんびりした学生たちが、絵画や彫刻、それに腕輪、イアリング、ペンダントなどの装飾品を売っています。これは美術専攻ではない学生たちも作っているもので、なかなかセンスのいいものもありますが、中には全く私たちには理解できない芸術作品も売っています。ここでは、タバコの煙のこもった、さわがしい、しかし大てい非常に安い地下の酒場でダンスを楽しむことができ、そばにいる人と気軽に知り合いになり、政治の問題を議論することもできます。シュワービングは、パリのモンマルトルやカルテ・ラタンと同じように、

学生の街でもあるのです。さて次に、ミュンヘンの名物「白ソーセージ」をぜひ一度試食して下さい。これは仔牛の肉でつくられており、からしをつけ小さなパンといっしょに食べる、大変食べやすい小さなソーセージです。この「白ソーセージ」は、毎朝パン屋さんが焼くパンと同じように、やはり出来たてが一番おいしいとされていますので、ミュンヘンの人は、お昼の12時の鐘が鳴るまでに全部平らげてしまった方がよい、などとよくいいます。

毎年、ミュンヘンでは数多くの国際会議や大規模な展覧会が開かれています。ミュンヘンが芸術と文化の都市であることもどうぞ忘れないで下さい。再建された壮麗なバイエルン国立歌劇場や、1753年に建てられたロココ風の美しいキュビエ劇場、それに王宮内には、このたび来日するミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団やバイエルン放送交響楽団が演奏会場として使っているヘラクレス・ザールがあります。また、数多くの近代的な、あるいは古風な美術館、なかでも有名な「古い絵画館」には、世界的にも貴重な絵画のコレクションがあり、ここへ行けば、ルーベンス、デューラー、ラファエルなどの巨匠の名作に接することができるのですが、こうした場所が、ミュンヘン市で毎年くりひろげられる数々の芸術行事の会場として使われているのです。

9月の終りから10月のはじめにかけて、ミュンヘンでは160年の歴史を誇る「十月祭」が行なわれます。これはビールを飲んで陽気にさわぐお祭りです。毎年数百万の人々が、チャーター機を連ねてヨーロッパの各地やアメリカからやってきます。日本人々には、この「十月祭」はまだあまりよく知られていないようですが、一度でもこれを見物した人ならば、その楽しさをけっして忘れることはできないでしょう。私の知っている日本人で、このお祭りの日本ではみられないはるかに解放的な雰囲気、全く感激してしまった人がいます。ミュンヘンのこうした雰囲気をなんといいお伝えしたらよいでしょう。われわれは“zünftig”（仲間のような親しさ）とか“gemütlich”（人情のこまやかな）といった言葉で表現しています。

ワーグナーを愛好したバイエルン国王ルートヴィヒ2世は、ミュンヘンの近くに、まるでおとぎの世界にでてくるような美しい城を三つ建てました。三つともミュンヘンから1時間半ぐらいで行けるところです。1936年にオリンピックが開かれた有名なスキ

ー場、ガルミッシュ・パルテンキルヒェンも同じく1時間半ぐらいで行くことができます。また、2時間ぐらいかければ、ザルツブルクやすばらしい景色で知られているベルヒテスガーデンやバート・ライヒェンハルへ行くことができます。私にとっては大変嬉しいことなのですが、もしみなさんが、私のふるさとミュンヘンをたずねようとなさるならば、夏か秋においでになるようおすすめします。ミュンヘンの冬は札幌に似て、やはりかなり寒いからです。しかし、ミュンヘンの芸術をゆっくり鑑賞しようという人や、スキーをする人にとっては、冬のミュンヘンもまたよいものです。モーツァルト、レーニン、法皇ピオ12世といった著名なしかもいろいろな分野の人々が、生涯の最も重要な部分を、このミュンヘンですごしました。バイエルン国王ルートヴィヒ1世は、かつてこういいました。「私は、ミュンヘンを見ないでドイツを知っているとはいえないような街をミュンヘンにつくりたい。」彼はまさしく、このことをやりとげたと、私は信じています。

（ルフトハンザ・ドイツ航空会社東京支店）



	テレビ	ラジオ	F M
2月2日<水>	総合・後8:00~9:30 ハイドンの主題による変奏曲 (ブラームス) ピアノ協奏曲「戴冠式」(モーツァルト) 交響曲第5番 (ベートーベン)		中継・後6:25~8:45 (モノラル) ハイドンの主題による変奏曲 (ブラームス) ピアノ協奏曲「戴冠式」(モーツァルト) 交響曲第5番 (ベートーベン)
3日<土>		第1・後9:05~10:00 交響曲第5番 (ベートーベン) ほか	
6日<日>	総合・後10:10~10:40 バイオリン協奏曲 (メンデルスゾーン)	第1・後6:05~6:50 ピアノ協奏曲「戴冠式」(モーツァルト)	
11日<金>	教育・後0:30~2:45 交響曲第6番「田園」(ベートーベン) ピアノ協奏曲第4番 (ベートーベン) 交響曲第1番 (ブラームス)		後8:00~10:00 (ステレオ) ハイドンの主題による変奏曲 (ブラームス) ピアノ協奏曲「戴冠式」(モーツァルト) 交響曲第5番 (ベートーベン)
20日<日>		第1・前11:05~11:55 交響曲第1番 (ブラームス)	後8:00~10:00 (ステレオ) 交響曲第6番「田園」(ベートーベン) ほか
24日<木>		第1・後9:05~10:00 ピアノ協奏曲第5番「皇帝」(ベートーベン) ほか	
26日<土>			後7:00~7:55 (ステレオ) ピアノ協奏曲第5番「皇帝」(ベートーベン) ほか
27日<日>		第1・前11:05~11:55 交響曲第2番 (ブラームス)	
3月3日<金>			後3:45~4:40 (ステレオ) ピアノ協奏曲第5番「皇帝」(ベートーベン) ほか
5日<日>	総合・後10:10~11:00 交響曲第2番 (ブラームス)		



実際、心を奪われるような素晴らしい経験です。さあ、ジャルパックでお出かけください。旅なれたコンダクターが同伴するので、ことばの心配、一人旅の不安なし。面倒な手続きもいっさいありません。世界各地へあらゆる種類のコースを用意しています。ジャルパックとご指定のうえ、いますぐお申込みください。 $\frac{1}{10}$ の頭金だけで出発できる日航トラベロンもあります。

オリンピックを観覧し、ヨーロッパ各地をめぐるジャルパック

JOYヨーロッパとミュンヘン・オリンピック12日間
(8月発).....388,000円
JOYヨーロッパとミュンヘン・オリンピック17日間<A>
(8月発).....472,000円
JOYヨーロッパとミュンヘン・オリンピック22日間
(8月発).....532,000円
JOY世界一周とミュンヘン・オリンピック17日間・
開会式観覧コース(8月発).....498,000円
JOY世界一周とミュンヘン・オリンピック22日間・
(8月発).....547,000円
このほかのミュンヘン・オリンピック・コースを始め
世界中へ魅力あるコースがたくさんそろっています



日本航空

海外旅行の第一歩は資料の請求から クーポン
を葉書にはり行先・出発希望日・氏名・住所・
年令・職業・電話番号をご記入のうえ〒100-91
東京中央郵便局私書箱205号 日本航空メール
ボックスへ。

クーポン
ミュンヘン交響楽

感動的な人生のひとときをジャルパックはお約束します

STEINWAY & SONS

Mario Del Monaco:



〈ピアノ〉スタインウェイ：ペーゼンドルファー 〈管楽器〉ヘッケル：バズーン、
ルーデルカルテ：フルート、ピッコロ 〈打楽器〉マッサー：マリンバ：シロフォン
：パイプ 〈ハーブ〉ライオンヒーリー、オーバーマイヤー 〈チェレスタ〉ムステル
〈チェムバロ〉ノイベルト、アムマー 〈電子楽器〉オンドマルトゥノ 〈パイプオルガ
ン〉ボッシュ、シュッケ 〈オルフの教育用楽器〉ゾノール 〈リコーダー〉ホッフ

世界の最高級楽器

株式会社

松尾楽器商会

日本総代理店

東京都港区六本木4-1-11 〈584〉 5251

TOSHIBA

——明日をつくる技術の東芝——



360°の音場で聴く音楽の心 4ch.プラスマイクミキシングの世界

ホールをゆるがすオーケストラ演奏から、ひとりつまびくギター演奏まで、生きた音の空間を忠実に再生する東芝ICボストン、前方から、後方から、左、右4つのスピーカーから流れでる4チャネルサウンドの立体感あふれる迫力と繊細な響きに、マニアからビギナーまで深い感動をおぼえることでしょう。ステレオ演奏をバックにあなたが歌えるマイクミキシングも音と語らうもうひとつの楽しみです。

ICボストンQM818

東芝4チャンネルステレオ

169,000円

- リアスピーカー2台追加で4チャンネル(マトリクス方式)再生可能
- FMワイヤレスマイクミキシング可能
- 4マルチアンプ(2チャンネル時)
- 総合出力100W(ミュージックパワー) 40W(EIAJひずみ率5%)
- 総合外形寸法: 幅1,515×高さ760×奥行395mm
- 総合重量: 57.5kg



Toshiba

東芝

巨匠。ピアニストが賞賛する
ヤマハコンサートグランドピアノCF。

世界最高と国際的信頼を得ている
ヤマハピアノ。巨匠ピアニストが多く
愛用しています。ピアノの素材である
木は、世界のあらゆる国から集めら
れ、名人芸の技術者たちの手でたん
ねんにつくりあげられます。よりよい

ピアノを完成させるためにヤマハは妥
協を許しません。たゆみない研究心
と高度な技術から生まれたヤマハピ
アノ。今日も世界の名だたるコンサート
会場で、巨匠たちと共に活躍し、美
しい音色で皆様を楽しませています。



ヤマハコンサートグランドピアノ

 **YAMAHA**

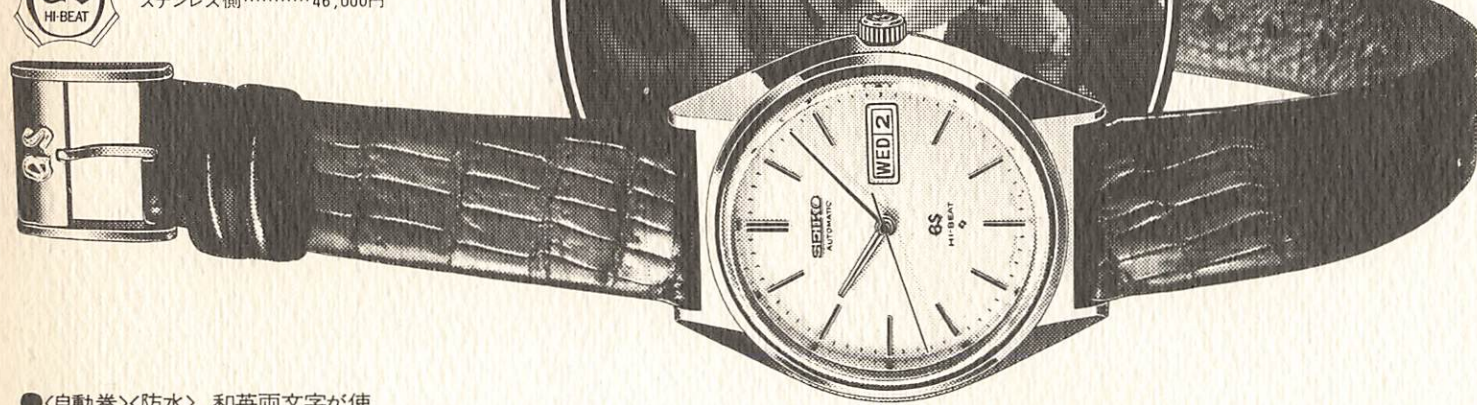
日本楽器製造株式会社

よゆうある時に笑いあり 左腕にグランドセイコーあり

グランドセイコー。連続360時間もの精度テストに合格した、高振動メカニズム。機能に裏づけされたデザイン。地位あるあなたの大切なひとときを、確かに刻みつづける腕時計です。



特殊強化ガラス(ハードレックス)
ステンレス側……………46,000円



●〈自動巻〉〈防水〉、和英両文字が使える〈曜日の表示〉、秒まで合わせられる〈セコンド・セッティング装置〉つき。

精度と格調

SEIKO
グランドセイコー

株式会社 服部時計店 本社・東京

札幌オリンピック公式計時 世界の時計 SEIKO

